

## 独立歩兵第一六三大隊

### — 死闘の撤退 —

愛知県 菅原 猛

私は、両親の元に七人兄弟の次男で、九人家族でした。両親は岩手県出身です。父が富士バルブ株式会社池田工場に勤務しておりまして、会社の業務関係で北海道十勝の池田町に居住していました。私の生誕地は十勝の池田町です。「かの大町桂月をして語らしめた」「富士で高さを知り、大雪（十勝）で大きさを知れ」でした。

私は十勝岳連峰を雲間に眺め、また雄大な大平原の北海道、子供心にも「気宇壮大」でした。小学校四年生の時に、父が会社の人事異動で住み慣れた十勝を後に、樺太の知取町の王子製紙株式会社に移転になりました。私は子供心にも日本国北辺の大地に立脚し、大気に戯れたことは、現在思い起こしても、最良の人生

勉強でした。

学校を卒業した時、名古屋の南区の有力な親戚に「北辺の地樺太より、日本国の中心である中京の地に、将来ある子供達のことを思って引き揚げて来い」と誘われ、思案感考の末、昭和十五（一九四〇）年・伯父・叔母のいる名古屋に樺太知取町より引き揚げて来まして現在に至っております。

私は機械会社の事務系に就職しました。兄は昭和十四年四月に軍隊に征き、満州の部隊にてソビエト（現ロシア）との国境警備の任務に就いていました。

昭和十七年五月、区役所より壮丁の予備通知があり、南区全域該当者、約百三十人が一堂に集まり徴兵検査が挙行されるとのことでした。改めて六月初め、兵事課より指示があり、「豊田小学校において、昭和十七年度徴集・壮丁検査がある、万事潰漏無きよう」との連隊区司令部より厳重注意有りしとか。

六月二十日学科試験、翌二十一日身体検査（徴兵検査）でした。二十日の学科試験も無事終わり、二十一日は早朝より威儀を正し、男子一生の晴れの日です。

会場の大同工業学校の講堂に全員整列、壇上には威厳を面に表した陸軍の現役佐官が徴兵執行官として、会場を睥睨（へいげん）しておられた。全員諸検査終了。執行官から約百三十人にそれぞれ合否を申し渡された。

私も「菅原猛！」と呼び出されて「菅原猛、甲種合格」と申し渡されました。私は「復唱、菅原猛、甲種合格」で万事恙（つつが）なく終了し、家路に着きました。「俺は甲種合格だ」と胸を張って、天にも昇るような心持ちでした（当時の青年男子は当然の事だと思った）。がその時長兄が満州（中国東北部）で軍務に服していた。万一の場合を思えば、一人喜んでいて良いだろうか……。

帰宅して両親に報告すると、父親は喜び「猛の軍服姿が見たいなー」と言った。母は平常は気丈な女性ですが、一人静かに物思いに耽り、肩を落した後ろ姿がなんだか寂しそだった。運命の悪戯か、翌月即ち昭和十七年七月十八日、大黒柱である父が心不全で急逝しました。私の軍服姿を見る時を楽しみにしていたのに残念至極でした。なお長兄は外地に在り、一切父が

鬼籍に入った由など軍事郵便でも知らさずにいました（もし親の死を知り軍務に支障が生じたら大変だと）。

区役所、兵事課担当者が来宅されて「通知票です」と入隊通知表を手渡されました。兵科は陸軍歩兵で来年四月一日入隊で、編成は名古屋です。集合は広島練兵場。フィリピンでの現地入隊教育でした。

ちょうどその頃、兄が満期除隊で帰って来ました。母の顔に笑みが浮かびました。私も出征まで少しでも親孝行をと思い、これ相務めました。近隣の古老が「兄に替わって不義を討つのだ。頑張って下さい」と。期日も近づき親戚や友人・近隣の人々に激励され、「万歳！ 万歳！」の声で、まるで歌の文句のごとく「歓呼の声や旗の波」でした。名古屋駅頭より出発しました。

集合場所の広島の練兵場で点呼があり。被服の支給で、私服は風呂敷に包み担当官に渡し軍服を着用、格好だけは案山子のような兵隊ができました。初年兵名

簿の履歴に基づいて班分けが行われました。私は班長として十人程の戦友の先に立つように指示され、各班長だけが三八式歩兵銃を持つことになり、他の者は丸腰で、雑のう水筒と飯盒だけでした。輸送下士官が「只今から船待ちの間は民間の宿屋や旅館に分宿する。各班長は充分連絡を密にすること」でした。

数日後に宇品に御用船が入港したとの通知があり、全員乗船すべく隊伍を整えて行進しました。広島練兵場から宇品港まで、胸を張って声高らかに軍歌を歌いながら、前段、後段と二連唱しながらの行進をしました。軍用御用船は「小池丸」一万三千トンでした。船足は速く時速十七ノットです。現地までも単船航海で護衛の海軍艦艇もなく、宇品港から関門海峡を経て東シナ海へと進み、一路南に向かって波頭を蹴立てて航行しました。全員救命胴衣を着用、甲板には沈没時の救命用として竹製の筏が積み上げてあり、船艙は最下層に諸物資を積み、兵員用の所には三段か四段の垂柵状に作られた所で起居するのです。座して寝るような状態でした。また潜水艦や飛行機に対しての警戒見張

り要員を各班から数人宛交代で出して、昼夜の別無く海と空を睨んでいました。

食事は各班ごとに食缶で受領して、各人の飯盒に分配するのですが、船酔いのために食うことができない者が多くいました。またトイレは、両舷に特設急造の木製のものが取り付けてあり、手摺りを力いっぱい握りしめて「要心せよ、落ちたら鱻ツカの餌食だぞ」ということでした。荒波の時は直接尻が海水で洗われて、完全な水洗便所でした。なお鱻は自分の身長より長い物や大きい物は襲わぬからと全員に禰用の晒し布を三メートル程支給されました。万一の時はこれを長く波に流しながら救援の来るまで泳げと教わりました。何事も知らぬ我ら初年兵としては有り難い程、種々教導して下さった。陸軍の兵隊が戦わずして「水漬く屍」になっては「不忠不幸の極み」であります。戦友同士で協力し、諸事遵守して行いました。

四月末頃にマニラに上陸し、近くの施設で十日程度休養し、改めて少し小さい船に乗船して出帆しまし

た。なおフィリピンは六千余りの島嶼とうしよよりなっています。船はその島々の間をさらに南に向かって進行しました。ミンダナオのイリガンに着き、上陸後さらに奥地のダンサランの屯営らしき所へ到着しました。ここが初年兵教育を受けるとのことです。

暑い南国での教育実習は大変な苦勞でした。が、一期の検閲も無事終了、中隊長から呼び出され「菅原一等兵、幹部候補生として受験せよ、推薦する」と言われましたが、母親が「上級志願は絶対止めとけ」と言っていたので中隊長の意に反しますが「菅原は候補生受験の器に非ず」といって即刻辞退を申し上げて了承して頂きました。中隊長は残念そうでした。

人事係から呼ばれて特別業務で、通信（暗号）手命令ぜられ勉強することになりました。当時一番困ったのは、マラリアで熱帯地方特有の熱病です。アノフェレスという蚊に刺されると伝染し発病します。「悪寒、戦慄、発熱」と言って、まず前兆の悪寒が来ると全身がたがた震えて歯の根も合わず、次の瞬間には四〇度以上の高熱を発し、一時人事不肖になることもしば

しばあり、軍務に支障を来す最悪の熱病でした。

ミンダナオ島の日本軍にも種々の推移がありました。自分の知るところでは、第三十師団「豹兵团」、独立混成第五十四旅団「萩兵团」と自分達所屬の第六師団「挺兵团」第一〇六二一部隊（志鶴部隊）第六百十三大隊です。

原住民はモロ族が一番多く、その他にも三つ四つもの種族がおりました。多民族国家故に、宗教、種族間の紛争が絶えず、スペイン統治約三百年と引き続きアメリカ統治五十年もあり、現在も種々紛争があります。またイスラム教徒が多く聖戦「ジハード」といって死を恐れず、殉教者「シャヒード」は天国に行けると。

このような宗教的信仰心で生命を惜みまず戦う民族などからゲリラ隊を編成します。また米比軍といって、アメリカから武器・食料を充分に給与し、日本軍に抵抗する集団が職業化して所々方々にいます。それでちよつとの油断が軍の存亡にかかわるのです。その

ため日夜治安維持に務めました。

ラオス州ダンサラン・ラナオ地区では、各方面に於いてゲリラ討伐作戦に出動しました。敵は地理に精通していますので大変難渋しました。時には工兵隊の上陸用舟艇で移動したり、敵前上陸や後方攪乱戦法で度々出動しました。その都度数人の犠牲者が出ました。今度は自分の番だろうか、戦友が一人逝き、また一人去る。

敵襲も頻繁になり、そして強力になりました。やがてアメリカ軍の進攻があるのだろうかと思いましたが、アメリカ空軍の艦載機グラマン、ロッキード等の戦爆両用機が飛来し、小型爆弾を投下し、引続き低空飛行で機銃を乱射して立ち去る。毎日午前の便と午後の便と一日二回必ず来襲し、この攻撃方法が日課になっているようでした。

昭和十九年十月、カガヤンから師団守備地帯のダバオに転進命令が出て陸路三六〇キロを踏破しました。さらに進軍してアボ連山（標高二、九五〇メートル）

を越え、またジャングル熱帯地方特有の諸悪条件と闘いながら、ミンタル方面でようやく師団前面の第一線激戦地に強行進出しました。多数の戦友が犠牲となって無念でした。

ダバオ戦線で散華した戦友は、飢餓による栄養失調・マラリア・赤痢等の病魔、加えて傷痍の身体での転進でした。路なき道を進み、倒れし戦友も旬日を経ず白骨化して悲惨を極めました。後日通過せし隊員は「白骨街道」という戦場の話も、淡々と語る事ができないと自分は思う。過酷にして極限状態の悪条件で驚嘆に値する数々の武勲は、自分で自分を褒め称えるしかないのです。そして天命を全うし、あの世に行った時、戦線に散華した多くの戦友と語り、そして何々大笑しようと思おう。

昭和二十年二月初旬、ミンタルの師団司令部に公用出張しました。第百師団（挺兵団）隷属各部隊の通信（暗号）主務者のダバオ作戦用の実務教育があり、志鶴部隊本部から自分を含め三人が出席しました。二月

十日実務教育終了。海軍設営隊のトラックに便乗して帰隊の途中、米軍艦載機グラマン三機編隊で急襲してきました。機関砲・機銃を乱射しながら旋回してしました。敵機は俺たちトラックを狙っているようでした。海軍さんに誘導され、近くの防空壕へ退避しました。

暫時して敵機退散で壕口に出たら、一人の海軍さんがじつと私の顔を見ながら「もしや菅原君ではないか」と問う。私も彼の顔を見て「ああそうか、木下君か」で共に手を取り合いました。不思議な因縁に驚きました。彼は郷里で一年先輩で、青年会の幹部で、私と意が通じ合った最良の友達でした。私より一年先に海軍に入団するのをお見送りしました。

その木下君はゴマの基地にいました。数日後、電報班長小沢少尉の許可をもらい、ゴマの海軍兵舎に彼を訪ねて一泊し、山程有る積もる話を一夜ゆっくり語り明かしました。帰路に着く時、海軍陸戦隊用の携行食や缶詰を多分に頂戴しました。お互いに今後の健闘を誓い惜別しました。が、神のみぞ知る運命、この時が

最後の別れでした。戦後復員して御家族に知らずべく調査しましたが不明でした。残念、申し訳なしです。

ダバオ方面の海軍の戦闘記録によると、昭和二十年六月一日前後にリバサイド東方のマンドックにて、海軍陸戦隊はアメリカ精鋭軍団と激戦を敢行し、健闘空しく玉碎されたとのこと。彼は「木下の命」として靖国の神になられたかな……合掌。ミンダナオ島において米軍との戦闘については従軍した人それぞれに語り尽きない苦勞があることと思います。

私も昭和十七年五月以来、警備に当たったラナオ州ダンサラン・イリガンを昭和十九年十月に撤収、船舶工兵隊の舟艇三十六隻に分乗しカガヤンに転進、同地を出発しダバオ兵団基地、デゴス地区バタタまで北から南へ三六〇キロを縦断する大行進軍でした。

昭和二十年四月二十六日よりデゴス地区米国正規軍との交戦です。海岸線の幹線は米軍占拠のため、五月八日デゴス地区ゴマ高地よりアポ山を踏破し、ミンタルの師団第一線の激戦場へと歩を進めました。以後ウ

ビヤンの山岳地帯まで幾多の犠牲者を出しました。舞台の断末魔でした。筆舌では表現出来ぬ労苦体験記録として残して頂きたく思います。

昭和二十年九月十日になって「生存者は下山せよ」の呼び声で終戦と知りました。九月十五日山岳陣地を後にして、米軍による武装解除を受け、敵の軍門に降る。「PW」と書いてある米軍兵士の作業服を着用させられました。あの時の心境は複雑怪奇・不可解、真に不思議でした。ただ口惜しい残念だ、反面はつとしたがこれで良いだろうか、尚も自問自答し半面疑心暗鬼でもあり答えは出ません。戦死した友に思いを走らせながら收容所にて旬口を過ごしました。

昭和二十年十一月十三日、最終点呼を受けて收容所からダバオ湾に停泊していたアメリカ軍の貨物船に乗船しました。種々雑多な感慨が、走馬灯のごとく脳裏を走ります。戦場の露と消えた戦友各位よ安らかに眠って下さい。我れ生あらば再度この地を訪れ、慰霊の誠を捧げます。

船は静かに南国の紺碧の空、緑の海に航跡を残した

がら北進する。甲板の上に立つと寒さが加わりました。日本の近海で少しでも早く日本の山並みでも見えぬかと背伸びして見ました。誰かが叫ぶ「富士山だ!」、霊峰富士が遠く左舷に微かに見えました。私は啄木の詩を口ずさむ。「ふるさとの山に向かいて言うことなし。ふるさとの山はありがたきかな」と、心にじーんと来ました。

三浦半島の岬の灯が見えました。なぜか涙が出ました。不思議なぐらい涙、涙でした。この光景は、甲板上にいる復員軍人全員の姿でした。中には力いっぱい大きな声で、叫んでいる奴もいました。感涙しむせびながら怒鳴っていました。浦賀入港十一月十四日、横須賀第七十五部隊跡にて復員手続き等を完了しました。

十一月十七日、名古屋駅着の列車。駅のプラットホームから四方が眺められる焼野原でした。燦然と輝く金の鯨の名古屋城も跡形もなした。一面の瓦礫の街跡、バラック住宅か商店がある。中京人魂で復興の息

吹きを感じました。自宅住居跡は焼野原でした。

一晚を名古屋駅のベンチで過ごしました。この時に駅前広場には、そこに焚火をして何人かずつ、屯していました。夜が冷えるから男も女も家の無い者が自然に相集っていたのだと思いました。

翌日から一生懸命家族の安否を尋ね回りました。親戚や友人知人と二日目にひょっこり弟が「兄さん！」と声を掛けて現れました。弟も海軍に行つて復員して来たところでした。はからずも今一人の弟も偶然出会いました。少年飛行兵で予科練に行つていたそうです。母と妹は岐阜県多治見に疎開して無事とのこと。長兄は満州から除隊、満期で帰っていましたが、再度防衛召集で出て行き、そして無事帰っていました。

母親が「家の男の子は四人が四人共無事に帰つて来てくれて有難う」と喜んでくれました。他家では一人息子が戦死したと悲しんでおられるのにと涙を流しながら私の手を取りました。妹が言った「猛兄さんのフィリピンは全滅だ、それでも母さんは毎朝毎夕陰膳

を供えて、猛が無事でありますように」と祈つておられたと。有り難きかな母親なればこそ。以後兄弟それぞれに力を合わせて復興に向かつて頑張りました。

我が身に引換え南の国で散華した戦友。中でも木下君の身内不明で連絡できないことが残念です。

五十余年過ぎた今日現在も、各々英霊の安らかな眠りあらん事を、心より御祈念申し上げます。合掌。

尚、名古屋編成・志鶴大隊は左のようでした。

総人員 一、〇四八人

戦没者 七二八人

生還者 三二〇人